Osaka University Knowledge Archive

Title	韓国住宅の敷地内空地の一貫性と変容性に関する研究
Author(s)	金, 奉暻
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45830
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名　金（キム）　奉暻（ビョンギョン）

博士の専攻分野の名称　博　士（工　学）

学位記番号　第　19539　号

学位授与年月日　平成17年3月25日

学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当

工学研究科建築工学専攻

学位論文名　**韓国住宅の敷地内空地の一貫性と変容性に関する研究**

論文審査委員　（主査）

助教授　鈴木　毅

（副査）

教　授　柏原　士郎　　教　授　阿部　浩和　　助教授　小浦　久子

助教授　木多　道宏

論文内容の要旨

韓国の住宅は、戦後から急激な都市化により住宅の量的供給優先の政策のため、生活環境においては潤いや豊かさへの配慮が少なく、韓国の伝統的な生活文化も失われてきた。さらに、個人主義的傾向が強まり、囲み型住居である都市型韓屋の構成を継承しつつ、個人の財産や安全を守るために、敷地境界を示す塀はより高くなり、鉄柵などをのせることで、閉鎖性の高い町並みとなった。しかし、1990 年代に入ってからライフスタイルの変化とともに生活環境の質を高める方向へ進んできた。特に、1995 年からの私有地を囲んでいる塀を崩し、一般市民に公開する「塀崩し運動」は、行政施設、公共施設、商業施設のみならず、一般住宅へ広がるなど、活発な動きが見られた。しかし、韓国住宅にふさわしい敷地内空地についての十分な論議が行われていないまま、「塀崩し」が行われ、西洋的な風景が形成され、韓国的な町並みが崩れる可能性も無視できない。さらに、住空間における生活行為は、住宅内部だけではなく、「マダン」「庭」などの敷地内空地の空間も含めた全体の住宅の中で行われている。住宅の建物に関しては多くの建築家や設計者によって研究・工夫されてきたが、住空間の一部としての敷地内空地についての研究はいまだ十分とはいえない実情である。このような背景から、韓国住宅の敷地内空地を対象に、敷地内空地の機能や役割を明らかにすることを本研究の目的とした。

第一に、韓国の伝統住宅、そして、植民地時代、戦後からの現代までの韓国都市住宅と敷地内空地がどのように変化してきたかを既往研究や文献から概略的に整理した。

第二に、韓国住宅の1階平面にある「マダン」「庭」「花壇」を対象に、韓国人が認識する敷地内空地の物理的な部分、敷地内空地から感じられるイメージ、敷地内空地における生活行為を調べた。さらに、敷地内空地で行われる生活行為については「マダン」「庭」での昔と今の生活行為の比較、「マダン」「庭」で現在行われている生活行為の内容を比較した。

第三に、現在の住まいの中で設けられている敷地内空地の種類に影響を与える要素や、敷地内空地の時代を通して一貫している面と変容している内容について明らかにすることを目的とした。そのために、家族数、世代数、居住歴などの居住者の属性、住宅形式の属性、室内生活のタイプなど様々な角度から敷地内空地についての基礎的な考察を行った。

第四に、敷地内空地に対する最近の動きとしての「塀崩し」運動を対象に、戸建住宅の塀を崩して、塀と接してい

た敷地内空地を一般市民に開放することが、都市の生活空間に及ぼす効果について明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国の住宅を特徴づけるオープンスペースの一つである「マダン」をはじめとする敷地内空地に着目した調査を通じて、その呼称と形式、生活の中での使い方、役割と意味について、現状とそこに至る時代的な変化を明らかにするとともに、近年の韓国の住宅の塀を崩す運動の実態調査を行い、韓国住宅の敷地内空地における、変化してきたもの（変容性）と変化しないもの（一貫性）、を考察したものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

(1) 主に文献調査によって、朝鮮時代から、戦後、現代に至る、韓国住宅における敷地内空地の変遷の流れを、住宅敷地内と動線上の位置、形式、規模、名称、基本的機能に着目して明らかにしている。

(2) 韓国住宅の敷地内空地の実態に関するアンケート調査から、敷地内空地の種類とそこで行われる生活行為の種類と総数が時代とともに減少しているが、マダンについては家事関係、庭については趣味の行為を中心に利用され続けていることを明らかにしている。

(3) 敷地内空地の形式とその利用のされ方に関する上記の動向が、住宅形式や住宅内部の生活のタイプと対応相関していることを明らかにしている。

(4) 敷地内空地における行為と認識に関するアンケート調査の分析から、「マダン」については、また伝統性と親しみのイメージがあり、とりわけ高齢者にその傾向が高いこと、「庭」については高級感、緑、美しさを感じる人が多いこと、またマダンの認識には、床面の仕上げが深く関わっていることを明らかにしている。

(5) 韓国デグ市で行われている、住宅の「塀崩し」運動の事例の調査結果の分析から、塀崩しによる私有地の一部開放は、町並みを美しく緑化し敷地内空地の「庭」的な性格を強くする一方で、同時に立ち話などの社会的な行為を発生させるセミパブリックな場所性を創出する可能性をもった敷際のつくり方となることを明らかにしている。

以上のように、本論文は、変化しつつある韓国住宅の敷地内空地について、呼称と形式やそこで行われる生活行為やイメージに関する変化の実態を詳細に解明することによって、今後の韓国住宅の計画の中で、伝統性と現代性を検討するための貴重な知見を提出しており、建築計画、都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。